



第27回スピーチコンテスト 平和へのメッセージ from 知覧

「平和を語り継ぐ都市『南九州市』」

「あした いのち かがやけ」
のテーマのもと、命の尊さ、平和の大切さを伝える「第27回スピーチコンテスト平和へのメッセージ from 知覧」が、8月15日、終戦の日に知覧文化会館で開催され、市内外の多くの方が来場されました。

今回は全国から5448点（うち小学生による平和作文コンテスト555点）という多数の作品が寄せられました。この中から1次・2次審査を通過し、最終審査に残った12人が命や平和の大切さについて発表しました。どのスピーチも素晴らしい内容で、戦争に関するもの、身近な家族や命をテーマとしたものなどがあり、会場の多くの皆さんは発表を熱心に聞いていました。



▲素晴らしいスピーチをしてくださった出場者の皆さん。

審査結果

中学生の部

- 最優秀賞 日下部 春希さん
れいめい中学校2年(薩摩川内市)
- 優秀賞 岩崎 楓子さん
川内中央中学校2年(薩摩川内市)
- 特選 橋口まゆさん
桜丘中学校2年(鹿児島市)
- 特選 木原 綾音さん
河頭中学校1年(鹿児島市)

高校生の部

- 最優秀賞 田中 結さん
佐賀西高等学校1年
- 優秀賞 大池 ももさん
一ツ葉高等学校2年(佐賀県小城市)
- 特選 溝脇 芽衣さん
武岡台高等学校3年(鹿児島市)
- 特選 白尾 遥華さん
鶴丸高等学校1年(鹿児島市)

一般の部

- 最優秀賞 橋元 彩さん 20歳
(鹿児島市)
- 優秀賞 工藤 武子さん 78歳
(熊本県熊本市)
- 特選 中川 祐志さん 40歳
(大分県竹田市)
- 特選 徳田 有美さん 44歳
(岡山県岡山市)

小学生の部

- ※市内の小学生による平和作文コンテスト
- 優秀賞 村上 白龍さん 穎娃小学校5年
 - 特選 田中 史奈さん 霜出小学校6年
 - 特選 鮫島 成一郎さん 別府小学校5年
 - 特選 名越 陵真さん 中福良小学校6年
 - 特選 仁田尾 真生さん 知覧小学校5年
 - 特選 塗木 梓紗さん 知覧小学校6年
 - 特選 福田 彩華さん 手裏小学校6年
 - 特選 折尾 志帆さん 青戸小学校5年



高校生の部で最優秀賞に選ばれた田中結さんのスピーチを紹介します。



【高校生の部】最優秀賞
田中 結 さん
(佐賀県 小城市)

「特攻の母」を演じて

中学生最後の文化発表会の劇は、戦後七十年の節目の年という事で、「知覧の桜」に決まった。この劇は、富屋食堂を経営する鳥濱トメさんと、トメさんを母と慕いここを訪れる特攻兵達やその家族との富屋食堂での交流を中心に展開される。表現することが大好きな私は出演を希望し、主役であるトメさん役に抜擢された。

佐賀県に住む私達は「戦争」を考える時、隣県である長崎の原子爆弾がまず思い浮かぶ。なぜなら小学六年生と中学二年生の時の修学旅行で長崎の平和記念公園を訪

れ、千羽鶴を手向け、原爆資料館では被爆者の生のお話を聴いたり、学ぶ機会が幾度とあったからだ。また、中学三年生では広島へ行ったので、戦争イコール原爆というイメージが強い。

出演者一人ひとりがそれぞれの役を熱演した。「感動した。」「素晴らしかった。」「涙が出た。」「初めて知った。」「そんな感想が沢山寄せられた。この劇を観てくれた沢山の人にあんな時代が過去にあったこと、御国の為にと命を懸けた若い特攻兵がいたこと、鳥濱トメさんという素敵な女性がいたこと、戦争は原爆だけではないということなどを知ってもらう機会になったと思う。

劇の出演者は総勢二十名。裏方を入れれば五十名で構成された。毎日我武者羅に「劇を成功させる」という目標に向かって稽古を続けた。しかし当時の時代背景や特攻兵のことなどを知らずに演じることはには限界がある。特に私は演じる鳥濱トメさんという人の知識がないまま本番を迎えることは許されないという思いがフツフツと沸いて消えなかった。そこで図書館で知覧や特攻兵に関する本を借り、皆で読んで勉強することにした。今まで知らなかったことが沢山あり、知ることによって皆の役への思い入れが変わっていった。

文化発表会が終わってからも、トメさんのことが頭から離れなかった。「知覧に行ってみよう。富屋食堂を訪れてみたい。もつとトメさんを身近に感じたい。」日に日にその想いが高まり、遂に中学校の卒業式が終了したその日、家族で知覧に行くという夢が叶った。富屋食堂に入ると、初めて来たにも関わらず、どこか懐かしい気がした。「トメさん、会いに来ましたよ。」心の中でそうトメさんに語りかけた。

「特攻の母」と呼ばれた鳥濱トメさん。特攻兵がトメさんを心から慕う純粋な想いとその想いに精一杯答えたトメさんの優しさで温かさ、そして強さに、私は何度も心を揺さぶられ、胸の奥が熱くなつた。トメさんの想いを心に留め、ひと台詞、ひと台詞を大切にトメさんを演じよう。私の心がしっかり定まった。五十分間の劇は大成功だった。

富屋食堂は今では資料館として、特攻兵達の生き様が紹介され、遺品や手紙、写真等も展示されていた。その一つひとつをゆっくりじっくり見ていく中で、私は魂の震えを感じた。父は流れる涙を拭うこともせず、母もハンカチを握りしめ、妹は今まで見たこともないような真剣な顔をしていた。私達家族はそれぞれ想いの中で、それぞれの時を特攻兵やトメさんに向

けているようだった。文化発表会の劇でトメさんを演じたことで知覧を知り、歴史あるその地を訪れることができた。特攻兵について理解を深め、鳥濱トメさんとも出会えた。

特攻兵のことを想う時、今ある日本の平和はこうした方々の命の犠牲の上にあり、この先の平和を守り続けていく責任は現代を生きる私達が担っているのだと強く感じた。若者達が、御国の為にとたった一つの尊い命を捧げた事実を、昔の悲話としてではなく、平和への教訓としていつまでも語り継がなければならぬと心から思った。トメさんは終戦後も命ある限り、特攻兵の為に祈り続けたという。「みんなのお母さんになりたかった……。」

慈愛に満ちたトメさんのこの言葉こそが、特攻兵への想いの全てを表していると感じた。若き特攻兵のこともトメさんのことも、決して忘れてはならない。我が家のすぐ近くを流れる祇園川では、今年も蛍が飛び始めた。「蛍になって帰ってくるよ。」

そう言うって飛び立った宮川三郎軍曹のことが思い出された。毎年見られる蛍だが、今年見る蛍の光は、昨年までとは明らかに違って見える。これから先、蛍を見る度知覧のことや特攻兵のこと、そしてトメさんのことを平和への祈りと誓いと共に、思い出すに違いない。



一般の部で最優秀賞に選ばれた橋元彩さんのスピーチを紹介します。



【一般の部】最優秀賞
橋元 彩 さん
(鹿児島市)

命に向き合う医師の覚悟

「彩、おじいちゃんの腎臓は片方ないのにこんなに長く生きられた。全部お医者さんのお陰だ。だから、おじいちゃんが死んだら彩の大学に献体するよ。」

縁側に座り庭を眺めていた昼下がり、祖父の何気なく発した言葉が私の耳に突き刺さった。これまで祖父が献体の話をしたことなど一度もなかった。あまりにも突然過ぎる「祖父の献体宣言」だった。今年八十七歳になる祖父は根っからの海の男だ。漁師町に生ま

れ、小学校を卒業すると曾祖父の漁船に乗り込んだ。そして、大勢の兄弟や姉妹を養うためにただがむしやらに働いた。成長して体力がつくと、遠洋マグロ船に乗りはるか南太平洋の漁場まで出かけて行った。だが、長年の無理がたたった祖父の体はボロボロになっていった。重い腎臓結核を患い、ついには片方の腎臓摘出を余儀なくされた。

目の前にあるのは、紛れもなく私と同じ人間のご遺体。念願の鹿児島大学医学部に入学し、雰囲気にも慣れた二年生の秋、ご遺体と向き合う解剖実習が始まった。

六人に一体の割合で与えられたご遺体を、我々医学生は頭の先から足の指先に至るまでくまなく解剖した。メスで遺体の皮膚を切り開き、体内にある臓器を一つひとつ確認しながら、初めて見る人体の不思議を懸命に頭にたたき込んだ。

ただ体にメスを入れるのではなく、教科書を見ながら、「今日は首の筋肉」、「明日はその奥にある神経を探し出す」という具合に毎日違った課題が与えられた。解剖実習は連日早朝から始まり夜遅くまで続いた。

この実習の目的は、人体の構造を知るだけでなく、医学の発展のために献体という尊い行為が行われていることに感謝する機会でも

あった。そして、何より重要なのは、医師という仕事への覚悟を決める儀式だということであった。

「医学生にとって解剖は確かに必要。でもおじいちゃんにはできない。」

遺体となりベッドに横たわる祖父の体にメスを入れる自分の姿が脳裏に浮かんだ。その瞬間、私の頭の中で何かが弾けた。息苦しいほどの思いが私の全身を襲う。

軍需工場に働きに出た東京での大空襲で死線をさまよい、家族を支えるために船乗りとしての過酷な労働を強いられた祖父。腎臓を摘出するほどの大病を患い苦勞し続けた晩年。祖父の苦難の生涯を思うと、言葉では言い尽くせないほどの哀惜の念が次から次に溢れ出た。

「ここにあるご遺体の一人ひとりにはかけがえのない人生があり、大切に思う人がいたんだ。」

私は目の前に置かれたご遺体をじっと見つめた。そこにあるのは、存命中に比べ格段に小さくなってしまった土気色をしたご遺体。死の瞬間を迎え、命の輝きはまったくない。しかし、それでも確かに生きてきた人間の証がそこにはあった。私はこのご遺体の帰りを待っているであろう家族を思った。

「この解剖実習で、私はご遺体と本当に誠実に向き合えたのだろうか。自らの肉体を我々医学生に提

供するという大きな決断をしてくれた本人や遺族の誠意に真摯に向き合えたのだろうか。」

私の頭の中を様々な感情が駆け巡った。

「今自分ができる、やれるだけのことはずべてやった。」そんな自らを肯定する気持ちと、「まだ他にもやれたのではないか。」という後悔の念が激しくぶつかり合う。

「彩、世の中に立派なお医者さんがたくさんいたらいいね。」

再び祖父が言葉を発した時、自らを献体すると決めた熱い思いが私の胸に真っ直ぐに飛び込んできた。その瞬間、急に胸のあたりが熱くなり、涙がこぼれ落ちそうになった。私は泣き顔を見られるのが恥ずかしくて、慌てて祖父に背中を向けた。

「おじいちゃん、私、絶対いいお医者さんになるから。」

決意した自らの気持ちを祖父に伝えたいと思ったが、胸が詰まりうまく言葉にならない。私は膝の上に置かれた祖父の手の上に自分の手のひらを重ねた。祖父が愛おしくてたまらなくなったからだ。私の手に祖父の手の温もりがじんわりと伝わってくる。

「うん、きっと大丈夫。」

祖父は小さく頷くと、少しだけ微笑んだ。そして、重ねていた私の手をギュッと力を込めて握り締めた。